

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所基幹研究「アフリカ文化研究に基づく多元的世界像の探求」2015年度第4回公開セミナー報告

タイトル: アフリカ農村における教育と家族をめぐるライフストーリー～エチオピア・マーレ社会にみる娘の就学を通じた人生の再解釈～

日時: 2015年11月4日(水) 17時40分～19時40分

場所: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所マルチメディアセミナー室(306)

司会: 目黒紀夫(AA研)

講師: 有井晴香(京都大学大学院)

コメンテーター: 児玉由佳(アジア経済研究所)

参加者: 12名

内容:

今回のセミナーでは、エチオピア南部州の農村をフィールドとする有井晴香氏を講師に招き、アフリカの農村に学校教育が浸透するなかで女性の生き方や自己認識がどのように変化しているのかについて講演をしてもらった。有井氏は、人生についての老女の語りが調査時期によって大きく変化している背景に何があるのか、また、そうした語りのなかからどのような女性の生き方の特質を見いだすことができるのかをライフストーリーの手法を用いて分析した。自身はきちんとした教育を受けていないが娘8人全員を公立学校に通わせて卒業させた老女は、以前は自分が娘の教育に積極的かつ主体的に関与してきたといい、男性優位の村社会のなかで教育の重要性やそれを受けた女性の価値について強く異議申し立てをしてきたことを強調していた。そこにおいて老女は自分を「男のような女」と表現していた。それが数年ののちには、娘の教育は夫が主導したものであって自分は消極的にしかかかわってこなかったというようになり、さらには現金を稼ぐことができない自らを「愚か」と称するようにもなった。こうした語りの変化の理由として有井氏は、夫との関係の悪化や学校教育を受けた娘から施しを受ける立場に留まるようになったことを挙げた。ただし、「愚か」と自らを位置づけることには旧来の規範の組み換えや乗り越えを試みている側面もある。この点で、調査村における学校教育の広まりは女性の社会進出をうながす働きをもっていたといえる。そして、そうしたなかで女性たちはさらなる機会を求めてしたたかに振る舞うようになっているという。

こうした発表にたいしてコメンテーターからは、老女の語りが変化した理由として語りのなかでは言及されていない出来事もあるのではないかと、調査村で重視されているのは学校を卒業したという事実であって何か新しい知識を教育をつうじて獲得したということではないのではないか、また、老女が娘たちに期待していた「男」としての役割は「息子」といいかえることができるのか、そして、今現在老女は村のなかでどのように周囲から評価されているのかといった点が

質問された。そして総合討論のなかでは、こうしたコメントも踏まえて、ライフストーリーという分析手法を本事例の分析に用いることの有効性や分析の対象にすべき情報の範疇などについて議論が交わされた。今回の講演では時間の都合もあって老女の語りが分析の中心となったが、それ以外にも豊富なデータを有井氏がもっているとのことであり、そうした情報ももちいたより深い分析を期待するというところでセミナーは終了した。

※当報告の内容は著者の著作物です。 **Copyrighted materials of the authors.**